



歯学部創設30周年



発行責任者: 歯学部長 宮崎 隆, 編集責任者: 広報委員長 五十嵐 武
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8 TEL: 03-3784-8000
ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp>

昭和大学歯学部は創設30周年を迎えました。

年頭にあたり

歯学部長 宮崎 隆

新年おめでとうございます。

昨年は政治、経済、社会が混沌とし、私達歯科界や歯学部を取り巻く環境も厳しい一年でした。しかし、今年は、昭和大学創立 80 周年の記念すべき年ですので、昨年度来検討してきた歯学部の評価向上プロジェクトに基づき、できることから一步一步確実に前進し、是非とも明るい年にいたしましょう。



1. 歯学教育の改革

本歯学部はこれまで教員が一丸となって教育改革に取り組み、その成果が少しずつ現れてきました。しかし、国民の期待と信頼に応えるためには、小手先だけでなく根本的に医療人として恥ずかしくない資質を磨いた歯科医師を育成する必要があります。今年の4月からは歯科医学教育推進室を正式にスタートさせます。そして、高齢社会の国民に安心・安全な歯科医療を提供できるように、さらに医師を始めとする医療チームの一員として国民の健康に貢献できるように、さらなる教育改革を推進していきます。私達は伝統的に歯科技術トレーニングにマネキンを活用してきましたが、今後は安心・安全の観点から高度な機能を備えた患者ロボットを歯学部として開発・活用していきたいと考えています。

2. チーム医療の推進

これまで本学医学部の附属病院では診療科(歯科)のスタッフや、歯科病院からの応援により、入院患者の歯科治療や口腔ケアに取り組んできました。これをさらに推進するために、新たに全学的な組織として昭和大学口腔ケアセンターの設置が理事会で承認されました。4月からの正式運用を目指して細部を詰めています。これまで行政や歯科医師会、あるいは関連の学会で、歯科医師や医療スタッフが高齢者医療の現場にチームとして関わることの重要性が謳われてはいますが、体制が整っていません。本学の口腔ケアセンターが全国のモデルになるようにしたいと考えています。

3. 重点研究の推進

顎口腔機能に関するハイテクリサーチセンタープロジェクトについては、お陰様で中間報告書を上梓するところまで到達しました。一層の成果があがるように最終年度まで宜しくお願いいたします。また、今年は

医学部を中心に歯学部教員も参加して、全学的な体制で脳機能をテーマに、グローバル COE に申請します。さらに、歯学部として新しい重点研究プロジェクトの検討を始める予定です。

4. 歯科病院の収支の改善

岡野病院長を始め臨床の先生方のご努力により、平成19年度の医療収入は順調に予算を達成して推移しています。平成20年度の予算編成においては、収支差額の一層の改善を目標に厳しい予算案を立てていただきました。将来の歯科病院の移転計画を考えると、この数年でとりあえず現在の建物や設備を整備しておく必要があります。医療を取り巻く厳しい環境の中での予算案ですが、達成できるように関係者のご協力をお願い申し上げます。

5. 国際化の推進

日本の国力が急速に地盤沈下し、このままでは世界の中に埋もれてしまう可能性が指摘されています。歯科医療も同様で、先進国のみならずアジア近隣諸国においても歯科は活況であるにもかかわらず日本だけが元気がありません。本学は昨年度の世界大学ランキング(500大学)で、日本の私立大学全体で第3位(私立医系大学では唯一)に選ばれています。私達は是非頑張って、国際的に通用する歯学部を目指しましょう。既に海外8大学と交流プログラムを締結し、学生や教員の交流を進め、成果をあげています。今年は教育や研究だけでなく、専門診療においても国際協力・連携を推進していきたいと考えています。手始めに、アジアの歯学部でおそらくトップの実力がある香港大学(世界大学ランキングなんと18位)に視察団を送り、学部教育だけでなく卒業後専門医教育について意見交換をしてきます。このほかにも歯学部・歯科病院の評価向上のために、できることは労力をいとわず取り組んでいく所存です。関係者のご指導とご協力を宜しくお願い申し上げます。

行事予定

広報委員長 五十嵐 武

2月5, 6日(火, 水): 歯学部4年CBT試験

2月9, 10日(土, 日): 歯科医師国家試験

2月23日(土): 歯学部4年OSCE試験

2月23日(土): 歯学部大学院入試

3月12日(水): 昭和大学卒業式・謝恩会

3月15日(土): 歯学部入学試験(選抜Ⅱ期)

須田立雄名誉教授が日本学士院会員 に選任される

歯学部長 宮崎 隆

去る12月12日の日本学士院総会において、本学名誉教授である須田立雄先生が、日本学士院第二部7分科の新会員に選出されました。

日本学士院は我が国の学術上最も功績顕著な科学者を優遇するための文部科学省の特別の機関で、会員は終身で、総定員は僅か150名に絞られ、第7分科は医学・薬学・歯学で定員が20名です。本歯学部にとっては、岡田正弘歯学部長（薬理学）について二人目の快挙です。歯学関係では長尾優先生、総山孝雄先生（本学客員教授）のお二人だけで、総山先生が逝去されてから空席になっていました。

須田先生は昭和52年に本歯学部の口腔生化学教室の初代教授に就任し、平成13年に定年退職されるまで20年以上本学の学生教育にご尽力されたばかりか、平成9年から11年まで歯学部長を務め、歯学部の発展に貢献されました。研究の分野では本学の看板教授として、日本ばかりか世界をリードし、これまで紫綬褒章、朝日賞、日本学士院賞を授賞しています。

須田先生は、40年以上にわたり、生体のカルシウム代謝を調節する最も基本的な因子であるビタミンDの代謝調節、作用のしくみ、活性型ビタミンDの臨床応用のための基礎研究に取り組み、近年新しい生活習慣病としてクローズアップされている骨粗鬆症患者の治療薬を開発しました。また骨吸収の主役を演じる破骨細胞の形成には、骨形成に關与する骨芽細胞と破骨細胞前駆細胞との間に細胞間接着を介して破骨細胞分化因子(ODF)と名付けたタンパク質が關与するという作業仮説を提唱し、その仮説が正しいことを分子レベルで証明しました。須田先生の一連の研究は、基礎生命科学と医学・歯学の進展に大きく貢献するものであり、医系総合大学の昭和大学としても、今回の選任は名誉なことです。

須田先生には今後は研究のみならず、高い立場から歯学の発展にご指導を賜りますようお願いするとともに、お元気で益々のご活躍をお祈り申し上げます。



研究室紹介（高齢者歯科学教室）

教授 佐藤 裕二

全部床義歯を担当し、「トターレ」の愛称であったが、山縣教授の定年を期に、来るべき超高齢社会を見据えて、「高齢者歯科学教室」に改称され、佐藤が2002年に広島大学から赴任しました。教授1、准教授2、講師2、助教2、員外助教6、大学院生9、研究補助員1、兼任講師12、研究生51で構成されています。

臨床:70歳以上の全患者と65歳以上の歯科治療上問題のある疾患を抱えた方が対象です。インプラント治療や唇顎口蓋裂患者の補綴治療、顎顔面補綴については他科と連携しています。

教育:講義は少人数 PBL を中心とし、基礎実習は医療面接、心電図血圧モニター、高齢者体験、義歯修理・増歯などを行っています。臨床実習では私が患者役となり、インフォームドコンセントのシミュレーションを行っています。

研究:①EBM グループ:エビデンスに基づいた基準作りを目指し、無歯顎堤の客観的評価方法や義歯治療のアウトカム評価を行ってきました。唾液の量だけではなく物性をチェアサイドで簡便に評価する手法を開発中です。

②インプラントグループ:臨床にバイオメカニクス解析を取り入れ、インプラントオーバーデンチャーにおける解析やインプラントと天然歯における力の分析を行っています。

③訪問診療グループ:高齢者の QOL の向上に貢献するため、要介護高齢者の治療効果について研究を開始しました。



これらのグループは有機的に連携し、臨床に貢献することを第一に考えて、研究を推進しています。誕生後まもない教室であり、教室員の平均年齢は30歳です。少しずつではありますが、国際学会での発表や英語論文が生まれ始めており、研究が芽を結びつつあります。教室員全員が目をは輝かせて活動する教室作りを目標としています。

認定医取得

広報委員長 五十嵐 武

- ・片岡洋子(歯科矯正学教室 員外助教)
日本矯正歯科学会認定医を取得
- ・北川 昇(高齢者歯科学教室 准教授)
日本顎顔面補綴学会認定医を取得

歯学部2年生口腔の生態系 PBL 始まる

口腔衛生学教室 村田 尚道

歯学部2年生の口腔の生態系 PBL が11月30日より開始されました。1年生で行った PBL から約1年経過しているためか、初日は討議の熱の入りがグループによって差がみられたようでした。しかし、2日目以降は、グループワークのコツを思い出したのか、コアタイムの時間が足りないほど討議が盛り上がりました。

本年度は、“問題基盤型” PBL となる2つのシナリオパッケージ「生態系の成り立ち」と「生態系の破綻」が用意されました。PBLを通して「これまでに学習してきた項目」、「これから学習すべき項目」の整理ができたことで、これまでの復習とこれからの講義への理解が深まったことと思います。また、新たに PBL にポートフォリオの導入を行ったことで、学生が自分の成長を実感できると共に、学年が進むにつれて学習内容にこれまで以上の深まりができると期待しています。

今回の PBL にも多くの先生方がファシリテーターとしてお手伝い頂きました。1月からの PBL に参加いただく先生も含め、感謝申し上げます。

口腔の生態系PBLを体験して

歯学部2年 加藤 真理

今回のPBLを通して問題に対する見方、問題を捉える状況判断という2点において、新たに得ることがありました。

シナリオを読み、1日目は「唾液の作用、口腔乾燥症(原因および関連疾患)、体調」、2日目は「認知症、口臭、寝たきり、口腔ケア」などのキーワードをグループで出し合って考えました。その結果、唾液の作用、唾液の低下に伴い口腔内で起こる現象、口腔ケアの方法、義歯の役割、口臭の原因などの項目を学びました。唾液の作用の学習は、口腔を歯科領域だけでなく、身体面から考えるという概念の解釈の手助けになりました。また、介護、認知症、口臭といったキーワードが出たことで、寝たきり、意思疎通不可能など、状況別の口腔ケアの方法を自分なりに考えるきっかけになりました。

歯科にかかわる疾患を、生理学、衛生学、解剖学といった各学問の枠を超えた多方面からとらえることの重要性を自分なりに気づくことができました。学習項目の中でも、興味のある内容とそうでない内容で理解度が違ってしまったので、今後この点は気をつけたいと思います。

また、ステップごとに明確にすべきことを班員で確認する作業を繰り返したので、今やるべきことは何か、次回までに自分がしなければいけないことは何かを認識することの重要性がわかりました。やることが多

いと頭がパンクしがちなので、現状把握をし、整理する習慣をつけたいと思いました。

口腔の生態系PBLを体験して

歯学部2年 船登 咲映

普段の授業では自分の意見を言う機会はほとんどなく、もともと自分の考えを言うことが苦手で、間違ったことをいったらどうしようという不安から初めの頃は意見があってもなかなか言うことが出来ませんでした。しかし2回目からはグループにも慣れ、ちょっとした質問にも真剣に答えてもらえ、もっと意見を言うようにと目標を設定したせいか積極的に意見を言えるようになりました。グループで討論している時は自分では気が付かなかったこと、思いつかなかったような意見を聞くことができ新鮮でした。

自己学習では同じ内容を調べていても、異なる視点から学習した人もいたので新しいことを知ることができました。同じ学習項目を調べた人の内容や発表は自分でも調べているので、より理解し易く、少し勉強が足りず、分からなかったところも発表を聞くことによって理解できるようになりました。皆で学習することで、自分ひとりでは分からなかったことを補えるののためになりました。自分で学習した内容は何度も本を読み返したり、レポートに必要なと思うところをまとめたりしていたため、頭に残りやすいと思いました。学習した内容が調度、授業の内容と同じ時がありましたが、自分で学習した後に授業があるとより理解が深まると感じました。また、その内容はこの前自分で勉強して知っていると思うと少し嬉しくなり、学習意欲が高まってきました。

訃報

広報委員 野中 直子

歯学部3年生の佐藤瑞穂さんは急病により1月5日に逝去され、6日に通夜、7日に告別式が執り行われました。宮崎歯学部長、立川学生部長、五十嵐教授(指導担任)、宮本准教授(指導担任)と3年生を中心とした多くの学生が参列し、故人をお見送りしました。立派な歯科医師を目指して勉強しておられた佐藤さんは、どんなにか残念だったことと思います。ご親族のお悲しみもさぞやお悔やみを申し上げ、心からご冥福をお祈りいたします。

診療統計(平成19年12月分)

医事課課長 長谷 孝義

	患者数	1日平均	前月1日平均	前年1日平均
外来患者	17,693	769.3	752.8	760.7
入院患者	407	13.1	13.0	15.5

台湾の障害者歯科国際カンファレンス で講演して

口腔衛生学教室 向井 美恵

昨年(2007年)の12月15～17日に台湾の台北で The international Conference of Oral Care for People with Disabilities がアジア・オセアニア諸国を中心に11カ国からの参加を得て開催され、私も招聘を受け Dental problems in people with disabilities and rehabilitation therapy for dysphagia のタイトルで講演を行いました。アジア地域の国・地域レベルの障害者歯科の学会は、日本が25年前(研究会の設立は更に11年前)に設立されたが、その後は昨年に韓国に設立されているに過ぎません。今回の台湾でのカンファレンスは同時に台湾障害者歯科学会の設立大会も兼ねていました。中国との関係から国レベルか地域レベルかは微妙ですが、アジア地域の第3番目の障害者歯科学会の誕生です。



医療保険制度が発達していないアジア諸国の障害者の歯科医療は、残念ながらまだまだ貧しく、一部のボランティア的な歯科医が担っているのが現状です。また、障害者の人口に占める割合も少なく、障害のある人にとっては生き難い生活環境にあるのが現実です。アジアの多くの国々の障害者に関わる歯科医は、日本の障害者歯科医療に種々の意味で大きな期待を抱いています。国際貢献が今後の課題となります。

国際歯科材料会議2007に参加して

歯科理工学教室 堀田 康弘

昨年11月21日から24日にタイ・バンコクで開催された国際歯科材料会議2007に参加・発表してきました。この国際学会(大会長 宮崎 隆)は、日本歯科理工学会の学術講演会が第50回を迎えるのを記念して、日本歯科理工学会学術大会との併催として開催されました。また、日本歯科保存学会、日本補綴歯科学会、大韓歯科器材学会、タイ保存修復学会が協賛学会として名を連ねておりました。

会場は、バンコク市内にある Queen Sirikit(現王妃の名前)公園に隣接した、バンコクで最大級の客室数を誇るインペリアルクイーンズホテルで開催されました。学会初日と二日目には招待講演として、昭和大学

学歯学部長の宮崎先生をはじめ、大阪大学、東京医科歯科大学といった日本からだけでなく、ADA Paffenburger research center(アメリカ)、慶北大学(韓国)、Chulalongkorn University(タイ)、The University of Newcastle upon Tyne(イギリス)、The University of Melbourne(オーストラリア)からの8名の講師による、歯科材料の現在と未来についての講演がありました。一般の口頭発表やポスター発表では、日本をはじめ、韓国、台湾、タイ、イラン、トルコ、イギリス、ルーマニア、オーストラリア、ドイツ、ノルウェー、フィンランド、マレーシアなど多くの国から合計259演題の発表があり、参加者も450名を超える大盛況でした。昭和大学では、歯科理工学教室から大学院4年片岡先生の口頭発表を筆頭に8演題と小児育成歯科の島田先生を含む9演題の発表があり、活発な討論が行われていました。



12月5日に現プミポン国王陛下の御生誕80周年を迎えるタイでは、街のいたるところに国王の肖像画が飾られ、また、我々が帰国する日は、タイで最も美しいと言われる灯籠流し(Loi Krathong Festival)のお祭りが、バンコク市内のいたるところで行われていました。このお祭りは罪を洗い清めるためバナナの葉で作った「クラトン」(灯籠)にロウソクや花などを乗せ、満月の下、川に流します。学会会場となったホテルの隣にある公園でも、数多くの燈籠が池に浮かべられ幻想的な雰囲気を醸し出していました。タイにはアユタヤに代表されるような世界遺産や、バンコク市内を流れるチャオプラヤー川の両岸にある歴史的にも有名な寺院など、観光するには事欠かない国ですが、今回は残念ながら学会開催のお手伝いに時間を割かれ、ゆっくり見学することもできなかったため、機会があれば是非、また行きたい国として私の中でリストアップされました。

編集後記

広報委員(口腔解剖学教室) 野中 直子

2008年も1か月が過ぎました。毎年”あつ”という間に時が過ぎていきます。1年の初めには今年目標などを考えてはみませんが、時のたつのが速すぎて、体も頭もついていきません。

年の初め、また入試シーズンのお忙しい時期にもかかわらず、執筆を快くお引き受けいただきました先生方に深く感謝いたします。

今年も皆様にとりましてさらに良い年となりますようにお祈りしております。

